活字文化公開講座

川上未映子さん講演

▲　600人の聴衆を前に

専修大学活字文化公開講座は、五十嵐崇之さん（経済3・就職課のアナウンス専門職養成講座を受講中）の司会進行で進められた。日髙義博理事長・学長の開会あいさつの後、川上未映子さんが登壇すると、大きな拍手がわき起こった。

日髙理事長・学長

「本日は本を書いてみたいと思っている人や編集者を目指している人もたくさんいらしていると聞いています。本に関するいろいろなお話をしたい」と、自身の生い立ちやなぜ本を書くことになったのかという話題から始まり、本を読むこと、書くことで伝えるものはなにかを以下のように語った。

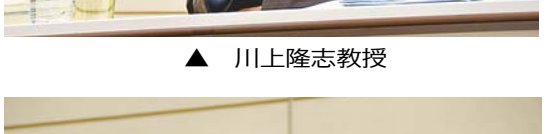
「決着がつかないものを抱えてそれを表現してほしい」「世界を見る角度大事」

死と生。悪と正義…には、相当の時間と技術が必要だと知り、大阪に…。以前からさまざまなものに対して違和感をもった。「なぜ」――と引っかかるものを、解明してくれるものはなく、そして「慰めではなく、悲しみや苦しみを平…と詩を書き始めた。価値観を揺さぶり続け、思考停止に陥らないよう、そして現実に対してフィクションを提示することが…大学に学んだ。スクーリングでたまに訪れる東京への車中、これから1カ月間みっちり勉強できるのかと思うとうれしくて涙が出そうになった。

10代後半、哲学に傾倒した。物事を突き詰めるやがて音楽にかかわの違和感を何とか表そうと懸命だった。

▲　川上未映子さん

都合により写真を掲載いたしません。
紙面をご覧ください。



▲　川上隆志教授

▲　米村みゆき准教授

編集者の役割や川上作品についてトークセッション

川上隆志文学部教授と米村みゆき同准教授とのトークセッションに移り、編集者という仕事について、母と娘の関係、小説の文体、川上作品について論じ合った。

岩波書店の元編集者である川上教授は「編集者は最初の読者として、作家の作品を読み込み、率直な感想を述べるような存在でなければならない。しかし最近はそういった編集者が少なくなった。本は作家が1人で作るものではない」と作家の作品に光を与える編集者の役割について語った。

米村准教授は川上作品を掘り下げ「芥川賞受賞作品の『乳と卵』では母と娘の関係が書かれた。母娘は身体と罪悪感の二つを媒介にした関係が強い傾向にあり、作品にはそれが見事に描かれている。同性同士のコミュニケーションについての作品である」と解説した。

川上さんは自身の文体について「重要なのは視点。文体は後からついてくる。文体を肉とするなら、文体に先立つ骨格（文体ゼロ）をよく考えた方がいい。自分がどんなイロハを持ち〝決着〟を構想しているか、世界をみる角度が大事だ」と語った。

会場からの質問に答え、「本を読むことは孤独になることではない。コミュニケーションが得られる」「自分が世界をつかんでいるのではなく、世界に自分がつかまれている」という独特の世界観も語り、会場の共感を得た。

来場者に話を聞いた。

「今まで生きてきて感じたことを感性豊かにお話しできる人。特に文体の話は興味深かった」（米持友加利さん・文4＝米村ゼミ）。「個性的な人柄で講演の内容は説得力があった。川上先生から編集者についてお聞きし、やりがいのある仕事だと感じた」（原里奈さん・同＝同）と満喫した様子を語った。

川上さんはサイン会にも気さくに応じ、サイン会の後には川上隆志ゼミが制作する雑誌『SHOW』のインタビューにも応じた。（1面に記事）

公開講座で3氏が紹介したおすすめの本

●川上未映子さん
『絶叫委員会』穂村弘／著（筑摩書房）
『タイタンの妖女』カート・ヴォネガット・ジュニア／著　浅倉久志／訳（早川書房）
『たけくらべ 現代語訳・樋口一葉』樋口一葉／原作　松浦理英子ほか／訳（河出書房新社）
『子どものための哲学対話』永井均／著 内田かずひろ／絵（講談社）
『日日雑記』武田百合子／著（中央公論新社）

●川上隆志教授
『遠野物語』柳田国男／著（角川書店）
『空と風と星と詩』尹東柱／著　金時鐘／訳（もず工房）
『美酒と革嚢　第一書房・長谷川巳之吉』長谷川郁夫／著（河出書房新社）

●米村みゆき准教授
『レキシントンの幽霊』村上春樹／著（文藝春秋）
『赤い指』東野圭吾／著　（講談社）
『母が重くてたまらない　墓守娘の嘆き』信田さよ子／著（春秋社）

※『空と風と星と詩』は伊吹郷訳版（影書房）が現在入手可能

▶　会場から活発な質問が…

専大とともに

神田神保町探索

〈〈15

▲　店内で山本憲一社長（中央）と美佐子夫人、訓史さん

武道具デパート　櫻　屋

神田神保町かいわいは「ブックタウン」と呼称されるが、意外な店も厳として存在する。今回ご紹介するのは「武道具デパート　櫻屋」。

名のとおり、剣道、柔道、空手道などあらゆる武道の道衣、道具がそろう。九段下交差点近くの目白通り沿いで、近くには日本武道館がある。

戦後間もない1948年、先代の故山本春男さんが、泰桜印柔道着の製造販売店・櫻屋を創業。講道館内で柔道着の小売りを始めた。「武道は、軍国主義教育の手段として用いられた経緯から、戦後の学校教育では全面禁止。しかし柔道は早く復活したようです」と現社長の山本憲一さん。「泰桜印」は道衣のブランドとなった。

2年後に神田三崎町に店舗を構え、68年、現在の九段下に移転。その間、剣道具の取り扱いや居合刀の製造販売を始めるなど取扱商品は、武道全般に拡大した。

専修大学の居合道部、合気道部、杖道会などの体育会や同好会、専修大学松戸高・合気道部とも長い付き合いだ。

居合道部部長の日髙義博理事長・学長、杖道会顧問の宇都榮子人間科学部長も同店のファン。

杖道は128㌢の丸い樫の木の棒で打ち、払い、突く武道。「手にしっくりなじむ上質の杖が見つかります。道衣も豊富。安心して道具を選べます」と杖道5段の宇都顧問。同会の指導者もよく足を運ぶ。

店は憲一社長のほか美佐子夫人、次男の訓史さんが守る。初心者にも丁寧に応対する。

「外国人もよく見えます。武道は欧米で根強い人気があります」（訓史さん）。大ヒットしたハリウッド映画『ラストサムライ』公開時は、本場のものを求めて特ににぎわった。「最近は女性客も多いですよ」。

憲一社長の祖父・泰山さんは戦中・戦後に活躍した剣舞家そして吟詠家。62年前の開業は泰山さんの活動が根底にあった。

憲一社長は、泰山さんが創始した居合道流派の伝統と志を継ぐ。「日常から離れて自身の内面を見つめる、かけがえのないひとときです」――心身を練磨する武道への思いを静かに語る。

▶　九段下駅近くのビルにある「櫻屋」

※武道具デパート櫻屋＝東京都千代田区九段北1-3-4 九段下東急真サクラビル1F ☎03（3262）1969